

令和5年度卒業式 学校長式辞（抜粋）

広徳中学校の生徒の皆さん、保護者の皆様、校長の児島です。8日は、天気にも恵まれとても素敵な卒業式になりました。3年生は立派に巣立って行きました。今回は卒業式の中で3年生の皆さんに伝えた私の式辞を1, 2年生の皆さんにも紹介しますので、読んでみてください。

『昨年の全仏オープンとイギリスのウィンブルドンで、十七歳で男子シングルの最年少優勝を果たし、今年パリで開催されるパラリンピックの出場を決めた男子車いすテニスの小田凱人（おだときと）選手は、九歳で骨肉腫と診断されるまで、ネイマールに憧れ、プロを目指すサッカー少年でした。ある日、左脚に激痛を覚え、大学病院を受診すると骨に発生する悪性腫瘍「骨肉腫」と診断されました。左脚の股関節と大腿骨を一部切除して人工関節を入れるという大手術を受け、その結果、左脚が不自由になってしまいました。その時、サッカー選手の夢を諦めざるをえなくなったことに落ち込んでいた小田選手を見て、当時の担当医がパラスポーツの存在を教えてくれたそうです。

その中でビビッときたのが、ロンドンパラリンピックの車いすテニスで金メダルを獲得した国枝慎吾選手の試合でした。「とにかくカッコよかった」と感じた小田選手は、すぐ両親に、「車いすテニスをやってみたい」と言ったそうです。車いすテニスを始めて三年後、中学一年生の時に、十八歳以下の世界ナンバーワン決定戦「世界ジュニアマスターズ」で優勝することができました。中学三年生の時には、世界ジュニアランキング一位に。そうしたこともあって、悩んだ末に中学校卒業と同時に「プロ宣言」をすることになりました。

小田選手がテニスを始めた頃の目標は世界一になることと、病気を持った子どもたちのヒーローになることでした。車いすや杖の生活になった頃、小田選手は街でジロジロと、人に見られることが苦痛だったそうです。しかしそんな時、彼は「障害をマイナスにとらえられたまま、人生を終わらせたくない。何かで成功して、有名になって一発逆転してやる」と思い、持ち前のポジティブさで厳しい練習に日々取り組み、目標を実現させていきました。そして今では、「車いすテニスの小田凱人」として多くの人に知ってもらえることを嬉しく感じ、車いすテニスを通じて、障害者へのイメージを変えていくことが、自分の一番の使命だと思っているそうです。ある意味、彼は病気になったことで、世界一にもヒーローにもなることができたと言えるでしょう。

小田選手にとってのハードルは乗り越えるものではなく、あくまで分岐点でした。彼にとって病気は、乗り越えるべき壁ではなかったし、闘うものでもなかったそうです。逆に、「障害がないとできないスポーツ、限られた人しかできないスポーツと考え、病気があったので車いすテニスができるし、今の自分がある。乗り越えたというより、あくまでも人生の分岐点だった。」とインタビューで語っています。考え方だけで、大きなハードルや乗り越えるべき壁も、自分のプラスになっていくことを、小田選手は彼の生き方をおして私たちに教えてくれているように感じます。』